

Title	過去の物語と計画概念：何が人生を構造化するのか
Sub Title	The narration of past experiences and life planning : what makes human life intelligible
Author	長門, 裕介(Nagato, Yusuke)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2014
Jtitle	哲學 No.133 (2014. 3) ,p.149- 165
JaLC DOI	
Abstract	<p>Over the past few decades, some philosophers have argued for the importance of temporal structures in any discussion of the meaning of life or a theory of happiness. Contrary to the notion of sum-ranking, much work has shown that the estimate of well-being or self-esteem varies with context and the role that narrative understanding plays in the whole of human life.</p> <p>With this position in mind, I focus in this paper on two intentions that are used for understanding one's whole life from the viewpoint of the self. First, this understanding involves one's intentional stance toward past time. This stance plays a role in the integration of various human experiences into a coherent plot or a story-line (called the "narrative mode) on the basis of a particular perspective. Another intentional stance sets the appropriate means-ends connection in human life. To make one's whole life intelligible, these two intentions must have a complementary relation.</p> <p>Based on this perspective, I present some suggestions for the practical estimation of one's whole life.</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000133-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

過去の物語と計画概念

何が人生を構造化するのか

—— 長 門 裕 介* ——

The Narration of Past Experiences and Life Planning: What Makes Human Life Intelligible

Yusuke Nagato

Over the past few decades, some philosophers have argued for the importance of temporal structures in any discussion of the meaning of life or a theory of happiness. Contrary to the notion of sum-ranking, much work has shown that the estimate of well-being or self-esteem varies with context and the role that narrative understanding plays in the whole of human life.

With this position in mind, I focus in this paper on two intentions that are used for understanding one's whole life from the viewpoint of the self. First, this understanding involves one's intentional stance toward past time. This stance plays a role in the integration of various human experiences into a coherent plot or a story-line (called the "narrative mode") on the basis of a particular perspective. Another intentional stance sets the appropriate means-ends connection in human life. To make one's whole life intelligible, these two intentions must have a complementary relation.

Based on this perspective, I present some suggestions for the practical estimation of one's whole life.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（倫理学）・日本学術振興会特別研究員（DC）

我々は、いつもではないにせよ、何らかの関心や契機に導かれて、現在だけではなく、「これまでのこと」や「これからのこと」を巻き込んだ人生全体に思いを巡らせることがある。単に過去の経験を思い出したり、何かを行為しようと思うだけでなく、それを人生全体と結びつけて考えるときのある種独特の感覚については、例えば「実存論的不安」や「不条理」の問題として哲学の議論にたびたび登場してきたものである。

さて、もし我々が自分自身の人生全体、あるいは少なくとも長期的な幅を持った出来事を把握し、それに対して意味を見出そうとするならば、現在の欲求状態だけではなく、過去に対するものと未来に対するもの、その二つの志向を持つことが必要になるように思われる。本発表では、過去に対する態度についてはポール・リクールが提案した「(過去の)物語化」の概念を、未来に対する態度についてはマイケル・ブラットマンによって知られる「計画」の概念を、それぞれ人生全体を語るうえで最も馴染むものとして取り上げたい。かいつまんでいえば、リクールの物語論は一定の関心に従ってこれまでの人生のなかで起きた経験を合理的かつ理解可能な仕方で構造化することを上手に説明してくれるのに対し、計画概念は、それは我々のこれからの行為を合理的に制御する指針を与える下図を提供してくれるものである。

このような準備を行った上で、さしあたり問題になるのはこの二つの志向の関係である。ごく日常的な場面においても、我々はこれまでのことを振り返ってそれを評価・点検したり、これからのことを計画して、それと適合するようにおおまかに行為の連関を定めたりする。さてそのとき、過去の物語化と計画は我々のなかでどのような関係になっているだろうか。もう少し突っ込んでいえば、それらは我々が今立っている現在を蝶番にして、対称的な関係になっているのか、そうではないのか、どちらなのだろうか。これを確認することが第一の課題である。

二つ目の問いはより根本的なものである。それは、なぜ我々は過去に対

しては「そんな昔のことは忘れた」と言ったり、未来に対しては「そんな先のことわからない」と言ったりせずに（つまり現在しかない、という態度を取らずに）、過去や未来を志向してしまうのか、という点に関わっている。これについては、過去の物語化や計画といったものが、人生の意味や価値を把握しようとする場面で、どのような意義を果たしているかを考察することで答えることになる。

1 過去の物語化

1.1 過去を振り返って説明するとはどういうことか

われわれがこれまでの人生を振り返る場面は様々であるが、典型的には次のようなケースを想定して欲しい。転職の面接で「あなたはこれまでにどのようなキャリアを積んできましたか」と聞かれるような場合である。そのとき、一般的には例えば次のように答えられるように思われる。「私は学校ではこれこれの専門知識を修め、その知識を生かして前の会社ではかくかくのプロジェクトに関わってきました」といったようにである。このとき、そう答える人は過去に対してどのような仕方で反省をしているのだろうか。

まず、われわれは、何か特別にそう聞かれるのでもない限り、これまでの人生で起きた出来事のすべてを語ったりはしないはずである。先に挙げたような質問に関する限り、例えば「私は小学生のときは昆虫採集が趣味でした」「中学の球技大会でスリーポイントを決めました」というようなことを語る必要はないし、ほとんどの場合でそうした挿話は相手の理解に支障を与えるものになる。この意味で過去の語りは常に部分的である。

ただし、部分的なものであるといっても、過去の語りは何らかの仕方で構造化されていなければならない。つまり、人生で起きた各々の出来事がばらばらにほかの出来事と無関係に起きたのではなく、ある出来事と別の出来事が有機的に連関しているような時間的あるいは意味的に秩序だった構造を持つものとして語る事が重要なのである。

さらに、これまでの人生について語る際、語り手は語り手が現在もっている知識や関心を利用して遡及的な仕方でも語ることが許され、また推奨されている。例えば、私は中学生くらいまで「大学院」という組織・制度があることを知らなかった。しかし、私が大学院というものを知る以前に行ってきたこと、関心を持っていたことが、大学院の存在を知ったあとに、あるいはそこに入学したあとに生じた出来事と無関係だということには語らない。もし、当事者がそれを経験したまさにそのときに持っていた知識だけで語りを作ろうとするならば、その語りの理解は非常に錯綜したものになるだろう。

このように「どのようにしたら自らの過去は理解可能なものになるのか」という観点から考察することで、われわれが人生を振り返る際の形式を説明することができるようになる。過去についての理解可能な説明は「(1) 現在のある特定の関心から (2) 過去に起きた種々の出来事を取捨選択することで (3) 意味連関をもったひとつの構造にまとめあげる」という特徴をもっているのである。

過去を振り返る際の上記のような基本的な特徴づけは、アーサー・ダントーやポール・リクールらの歴史叙述論をより個人的なスケールに落とし込むような仕方でも再構成したものである¹。彼らの目標は歴史の経過をその究極目的から説明するような実体論的歴史哲学や生じた出来事を時系列に従って並べることで満足する素朴な実証主義に抗して、各出来事同士の関係を記述者が現在立っている視点から語り直すことに歴史の説明の根拠を求める、その仕方の探求であったとあってよい。その際、彼らはこうした過去についての説明あるいは理解の構造を「物語(的)」と呼んだ。本稿でもそのおおまかな発想を継承して、先の三つの特徴を持った説明の構造を「物語」という語を用いることにしたい。

1.2 自己理解と物語

前節において、過去を振り返ってそれを説明する際に物語的構造を考慮

に入れる必要がある理由について、われわれはそれを聞き手側にとっての理解の便に求めた。ひとの人生を構成している経験の要素は、そのひとつひとつを単独に眺めてみれば、その大部分が偶発的に生じたものであり、ほとんどそれ自体では無意味であることすらあることに気づくだろう。それらを構造化し、なんらかの文脈を与えることによって人生全体に意味を与えることが物語の機能なのである。

ところで、われわれは過去を構造化しそれを語ることでいったい何を理解しているのだろうか。それは「昨日私が目撃したひき逃げの車の色は青です」と語るのとはどう違うのだろうか。過去についての物語的な説明がもっとも効果を発揮するのはどのような場面であるかを考えることによってこの問いに答えることにしよう。

先の就職面接のような関心をはっきりしたものではなく、かなり漠然とした仕方でも個人の来歴全体が問われることもあり得る。よく知られていることだが、例えばあなたのことを個人的にもっと知りたいと思っている人が「あなたはどんなひとか」と問うてくる場合、国籍や職業をもってそれに答えるだけでは十分とは言えない。このような実存的な問いに完璧に答えられるかどうかは定かではないが、もし真面目に応答しようとするならばそれは自分自身の人格とその形成過程をもって応えるしかないように思われる。何が自分を自分たらしめているのかについて説明することは、自分の仕事上のキャリアについて語ることに比べると、関心が発散しているがゆえにずっと難しいものになる。仕事上のキャリアだけではなく趣味や生まれた時代、家族や友人との関係といった様々なカテゴリーの要素が関係しているからである。このような「異質なものの総合」²を行う場面においてこそ物語は重要な役割を果たすだろう。物語は単に複数の要素を一つの関心のもとに構造化するだけではなく、異なるタイプの要素を一挙に語り組み込むことで理解を容易にすることが出来るからである。逆に言えば、どのような関心から出発した過去の物語も究極的にはそのひとの

格形成の一部をなしているということが出来る。

もう一つ別の問題に答えておこう。ここまで、自分の過去の物語を語り理解を促す相手として、自分とは異なる他人を想定して話を進めてきたが、個人内部で改めて過去の物語を言い聞かせることによって何が得られるだろうか、という問いである。

すぐに思いつくのは、過去を物語化することによって「自分はどのような性格なのか」「自分には何が出来るのか」、を再確認するというものである。だが、過去の物語は自己理解を単に確認するだけではなく、自己理解を根本的に変えてしまうこともありうる。われわれは常に自分の過去を顕在的に意識して人生を送っている訳ではないが、一度作り上げた物語がそれ以後も絶対に壊れないものとして存続し続ける訳でもない。どういうことか。

ある人間が幼少期から現在に至るまで冷酷で残忍な人間であるという自己評価をもち続けてきたとしよう。彼がそうした信念をいつ持ったかは明らかではないが、ほとんど自分はそうした性格を持っているということを意識せずとも躊躇なく冷酷な行為に及ぶことが出来るほどである。だが、あるとき何らかの拍子に自分の過去を振り返ってみると自分は冷酷な行為を楽しんで行っていたのではなく、むしろ多少の良心の呵責を覚えていたこと、自分の行為は自分の性格からではなく劣悪な環境に強いられたものであることがわかったのである。

改心の物語に典型的なこうした事態がわれわれに教えてくれるのは、自己理解は過去の物語化によって単に強化されるだけではなく新たに作られたり壊されたりするが、それはつねに現在のその都度の関心に依存して構成されるということである。もちろん、そうしたことがままあるからといって、過去の物語が当人や他人にとって理解の指標にならないというわけではない。過去の物語化はわれわれの自己理解の安定に必須の契機であることは何度も強調されてよい。だが、過去の意味や価値は不変のもので

はなく遡及的に意味が変化しうるものであることもまた事実である。このような遡及的な意味／価値の変化が抱えている不安定性とでも呼ぶべきものについては後に述べることにするが、一つ指摘しておきたいのは、過去の物語は作ったり壊されたりするものである以上、常に未完の物語に留まるということである。現在の位置から人生全体を考慮に入れるために、次節以降は未来に向かう志向を取り上げることにしよう。

2 計画概念

2.1 計画は行為を統制する

現在の特定の関心から過去を振り返って理解可能なものに仕立て上げるのと同様、われわれは未来に対しても目的を設定し、それを達成するために必要なおおまかな行為の連関を決めておくことがありうる。プラットマンはそれを「計画」と呼んでいる³。彼によれば「計画を立てる」とはとりもなおさず「諸行為を制御する指針をたてる」ということである。計画の概念は、行為を促すという点においては欲求によく似ている。しかし、欲求と計画は異なるものである。

例えば「今日の15時に私は会議室に行きたい」という欲求を私が持っているとしよう。そこで、私が会議室に向かっていると友人から声をかけられて喫茶店に誘われたとしよう。そのとき、「15時に会議室に行きたい」という欲求より「友人とお茶を飲みたい」という欲求の方が強いとしたら、私は喫茶店に向かってしまうだろう。欲求がすべての行為を支配していると考えた場合、このように二つの相反する欲求をもつことがありうる。こうした事態を防ごうと思ったら、「相反する二つの欲求を持った場合、先に抱いた方の欲求を優先する」といったメタ規則を付け加えなければならない。しかし、そのようなメタ規則がつねに適用できるかどうかは状況次第である。欲求だけを基礎においてこれからなされる行為を説明しようとする、他人との行為の調整はひどく難しいものになる。約束をするに際しても、お互いが持ちうるすべての欲求やそれに対するメタ規則の

すべてを知っていなければスムーズにいかない危険があるからである。

ブラットマンが主張するのは計画概念を導入することによってこのような説明の煩雑さを避けることが出来るということである。計画は、単にその行為を促すだけでなく、その計画自体が完全に不可能になるような不測の事態（例えば会議室のある建物が火事になるといったような）に直面しない限り、検討の余地なくその行為を実行に移させるよう制御する役割を果たしている。「会議室に行きたい」と「お茶を飲みたい」という二つの欲求を同時に抱くことがあるのとは異なり、「15時に会議室に行く」という計画と「15時をまたいでお茶を飲み続ける」という計画を同時に採用することはありえない。

人間は単に欲求するだけではなく計画する生き物でもあるというこのブラットマンの見解は、一見したところ端的に不確実であるようなこれらからなされる行為を合理的な水準のもとに理解可能にしてくれるものに思える。だがその一方で、これからの行為をひとつの計画によって縛り上げるのはあまりにも主知主義的で実践の場面でどれほど適用可能なのが疑問に思うひとつがいたとしても不思議ではない。次節では計画が要請する合理性がどの程度まで個別の行為を規定するかを検討しよう。

2.2 計画概念はどの程度の合理性を要求しているのか

ひとは人生において様々な目的とそれを達成するための計画を持ちうるが、そのなかにはほとんど合理的ではなく理解不可能に思えるものも存在する。他人（あるいは自分自身）の人生全体を把握するにあたって、その計画が理解可能なものかそうでないものかを吟味することは重要である。

ブラットマンは計画を策定するにあたっては二つの種類の合理性が要請されるとしている。整合性（consistency）と一貫性（coherence）である⁴。逆に言えばこの二つの合理性からのみ計画の妥当性は判断されるのであって、その他の基準（例えば経済的合理性）は一切考慮に入ることはない。

計画の整合性とは、当該の計画が本人が持っている信念や他の計画と齟齬を来していないかどうかという点に関わっている。ある計画が他の計画と相反してしまうケースは先に述べた（「15時までに会議室に行く」計画と「15時をまたいで友人とお茶を飲む」計画の二者択一）。信念と計画が齟齬をきたす計画としては、例えば「太陽を西から昇らせる」計画のように、絶対に不可能だと分かっているにもかかわらず計画を立てようとしている場合が考えられる。注意すべきなのは、これらのことについて、そうした欲求を持つこと自体は不合理でもなんでもないとということである。会議室についてひとを待っている間に「喫茶店に行きたいなあ」と思うことは何ら不合理ではないし、この世のどこかに「太陽を西から昇らせたい」という欲求を持っているひとがいたとしても不思議ではない。ただし、それらを「計画として」持つことは不合理なのである。

もうひとつの一貫性は計画の目的－手段関係が適切なものであるかどうかに関わる。目下の問題についてはこちらの基準の方がより重要であろう。ここではどの程度まで強い合理性が要求されているかが問われているからである。ブラットマン自身の見解では、計画はその実行の仕方に関わる適切な下部計画が必要だが、その下部計画が網羅的である必要はないとしている。例えば私が三ヶ月後に外国語の検定試験に合格しようという計画を立てているとしよう。そのためには受験の申し込みや試験対策など様々な下部計画が必要になる。だがその下部計画に対して、受験会場までは自転車で行くか電車で行くかといった細部や受験日に急用が入ったらどうするかといった例外状況をさしあたり考慮に入れる必要がないのはもちろん、リーディングから解き始めるかライティングから解き始めるかといったことまで計画している必要はない。それらは時がきたら詰めればいいだけのことであって、そうしたことが試験の三ヶ月前に決まっていなかったとしても、その計画が不合理だと判定されることはないのである。このとき、計画がどの程度まで具体的でなければならないかは、設定した

目標と行為者の技術や経験の関係によって決まるとされる。

ブラットマンの計画概念が要求している合理性は相当程度プラグマティックなものであって、われわれの日常の実践から乖離することなく長期的な目的を合理的な仕方で見界に入れることが出来るという点で優れたものである。

3 人生全体の構造化

3.1 過去の物語化と計画の相互関係

これまで、現在から過去に向かう態度である物語化と現在から未来へ向かう態度である計画概念について見てきた。われわれが現在だけでなく時間的幅を持ったものとして人生を把握することを欲するならば、この二つの概念は必須のものである。ところでこの二つの概念は現在という蝶番を挟んで完全に独立して機能するものなのだろうか。過去の物語化と計画を立てることが相互に影響し合うことはないだろうか。本節ではこの二つの関係を確認してみよう。

まず、計画を立てて適切な目的-手段関係を設定する際、自己の性格や能力についての理解が不可欠であることはほとんど明白であるように思われる。全く同様の計画を立てた場合でも、あるひとにとってはその計画は合理的と見なされるが、別のひとにとっては不合理だと見なされるような場合がありうる。例えば、青年期に意欲を持ってスポーツに親しんできたひととこれまで全くスポーツをやったことなかったひとのどちらもがプロボクサーになるという計画を立てたとする。その場合、後者の計画が合理的であると判断されるのに要求される計画のきめ細かさは前者に要求されるよりもずっとハードルが高いものになるだろう。自己の性格や能力に対する正確な理解の欠如は、往々にして不合理な計画の設定につながっている。その意味で過去の物語化（によって得られた自己理解）は計画の設定に大きく関係している。物語化はそれ自体として未来志向的ではないが、緩やかなかたちで行為を誘導する契機を含んでいるのである。

では逆に、過去の物語はどのように計画を必要としているのだろうか。これは、先に述べておいたように、過去の物語が本質的に未完であり、最終的な意味が確定されていないままになっていることと関係している。人生のような長いスパンをとってみると、多くの場合、ある計画が別の計画の部分になっているような構造を持っていることに気づかされる。これはある計画 A が完了した後も、より上位の計画 B が完了するまでは最終的な意味ないし価値が決定されないということである。あるひとにとって「医学部に入る」という計画 A は「よき医者になる」という計画 B の部分を成している。このとき、A は達成されているが B は達成されていないならば、当人の人生にとって A がどのような意味をもたらしているかは明らかではない。こうした最終的な意味付け・評価が未完に留まっている出来事が解釈可能になるように道筋をつけるのが計画概念の過去の物語に対する役割なのである。

このような仕方でも過去の物語と計画概念は相互に参照しあっており、当事者のこれまでの記憶と未来に対する想像力の及ぶ範囲において、人生をひとつの構造体として理解することが出来る。

3.2 構造の「不安定さ」

先に過去の物語化における改心の例で触れたように、われわれの過去についての解釈はその都度の関心に相対的であって、過去の解釈の変化によって計画の内容や目的-手段関係もまた変化しうる。これは過去の物語化と計画によって構成された人生につきまとう「不安定さ」である（もちろん、過去の物語化も計画も構造化である以上、われわれの土台となる過去を安定させ、傾向を持たせることが期待されている。しかし、幸か不幸か人間の人生には価値観や関心を一変させる出来事が起こりうるのである⁵⁾。これは歴史的事件について、たとえば三十年戦争についてスウェーデン政府について着目するのか、ドイツの農村社会について着目するかで叙述が変化すると同様である。こうした筋の同一性の不安定さは、「人生

全体」という問題についてその意味や価値の側面を議論する際に、どのような帰結をもたらすだろうか。以下、それについて検討することにしよう。

多くの場合、こうした批判は物語論の有効性の限界を指摘する際に用いられてきた⁶。代表的な物語論者のひとりであるリクールですら、『時間と物語』期においては、物語が構成する筋と主体の同一性（物語的自己同一性と呼ばれる）について次のように困難を指摘している。

物語的自己同一性は、安定し、首尾一貫した自己同一性ではない。同じ偶然的な出来事について幾つかの筋を創作することが可能なように（その場合それは同じ出来事ではない）、自分の人生についてもいろいろ違った、極端には対立する筋を織り上げることも可能なのである。（……）この意味で、物語的自己同一性は絶えず作られたり壊されたりする。（……）物語的自己同一性はこうして、少なくとも解決の名となるのと同じくらい、問題の名ともなるのである⁷。

言うまでもなく、こうした問題は人生の価値を「神の計画に奉仕する」「国家の繁栄に尽くす」といったなんらかの単一の目的を設定していないことによって生じている。人生の意味に何らかの（単一の）目的論を導入すれば、当人（あるいは評価者）が設定する関心は一意に定まり、価値評価に際してはその目的の到達度によって計れば良いことになる。しかし、本稿では人生について何が真に価値あるものかについては直接触れることはしないでおく。問題は過去の物語化と計画によって人生を構造化することがわれわれの実際の生き方 way of life とその評価作用にどの程度馴染んでいるか、である。

再考しなければならないのは、ひとつの人生計画にひとつの関心、ひとつの同一性が対応し、それが首尾よく行われているかどうかという点に人生の価値は尽きているのか、ということである。もしそうであるとすれ

ば、そのような目的論的世界の住人は「休むために働き、働くために休む」といった循環的な生や「医者となって人々の役に立つためには国家試験に合格しなければならず、試験に受かるためには医学部のある大学に進学しなければならず、そのためには受験のためにそれに適した勉強をしなければならない……」といった逆算的な生き方が人生の主要なフローということになり、人生のその他の部分はおまけのようなものか、せいぜいその生き方の補助でしかないことになってしまうだろう⁸。あるいは人生計画の変更という問題はどうか。ある人が様々な理由から、医師として人間に奉仕するよりも音楽家としての生を歩みたいと人生計画を変更したとする。そのとき、その従来のプロジェクトが価値を構成し、それに応じてその人物が為してきた行為や同一性といったものは全て水泡に帰してしまい、誤ったプロジェクトがこれまで定立されてきたと考えるべきなのだろうか。

おそらくそうではない、と考える余地がわれわれには残されているように思える。次節以降では、人生を構造化した後の、その価値評価に関わる場面を見ていこう。

4 人生の価値と複数の関心のもとでの評価

人生の価値をどのように評価するかについてはさまざまな立場があり得るが、ここではさしあたり、人生の価値を単に各瞬間に生じた価値の総和として捉えるか、あるいはそれに尽くされない何かがあるのか、という議論の対立として見てみよう。

一方に、人生には個別の価値の総和に尽くされないような構造的な価値があることを主張する論者がいる。この陣営を代表するのがヴェルマンであるが、彼によれば、人生は各瞬間に得られた価値の総和的ではなくドラマティックないし物語的な関係によって評価されるべきである⁹。「塞翁が馬」という故事のように、ある時点 t_1 で得られた価値がそれよりあとの時点 t_2 で生じた出来事との関係によって遡及的に変化するということ

は十分に考えられる。この場合、人生の価値は瞬間的に得られた価値の総和というよりもある時間的な幅のなかで価値や価値を変動させる出来事などのように配分されているかが問題になる。たとえば、幸福の総和が同じであったとしても、不幸な幼少期から幸福な壮年期を好むか、幸福な幼少期から不幸な壮年期を好むかは人によって異なる。人生のような長期の時間的幅の中では、諸々の出来事の価値は総和的な仕方のみでは決定できず、「人生の二階の価値」とでも呼ぶべきものが重要な意義を帯びてくる、というのがこの指摘の眼目である。

ここまで論じてきた「人生全体の構造化」ということは、この二階の価値を把握するための基盤を提供しうるものである。構造化が為された後にこそ、こうした二階の価値の観点が現れる。ただし、われわれがそれを把握する際の関心のありかたについてはもう少し考えてみる余地がある。

ここで人生の価値の本質を為しているものは、こうした「人生の筋立て」から得られた諸価値の分配パターンの形であり、その際の関心は美的なパースペクティブである、と論じてみたくなるかもしれない。確かに、「人生の上昇傾向（ないし下降傾向）」という仕方で筋を編成する場合には、「どのような人生が美しいと考えるか」といった審美的なパースペクティブで働いていることになるだろう。しかしながら、ヴェルマンであっても二階の価値についてわれわれが言及できるのは、その源泉として、総和主義的に計算可能な単純な快（一階の価値）から可能になってくることは否定できないように思えるし、快樂主義的な態度・関心から行う自己評価が二階の価値よりも人生にとって本質的ではないと考える理由もまた見当たらない。たとえ審美的なパースペクティブであれ、われわれが自分の人生全体の評価を行う際に特権的なパースペクティブ、マスターナラティブのようなものを認めないとしたら結論は以下になるだろう。

例えば、「彼の人生は不幸だったが意味があった」という文から考えてみよう。この文は一見して有意味であり、そして、多くの人間が文学的・

歴史的悲劇に関心を寄せるポイントはそこであるように思われる。この場合、物語的に言えば「彼の人生はそのなかで得られた快の総量が苦の総量を下回っていたので不幸であった」という快樂ないし福利をもとにした評価作用と「(例えば)彼の自己犠牲によって多くの人が救われた」という道徳的な評価作用によって案出された二つの筋があることがありえよう。この二つの筋はどちらも理解可能であり、また共存可能である。そして複数の筋立ての共存が認められるとしたら、ある筋のもとでは編成の対象にならないような瑣末に見える出来事が、別の筋のもとでは重要な要素を持つこともありうる。それは例えば「医師としての自分の人生」と「誰かの父としての自分の人生」という関心のもとでは有意味な物語を構成する際に取捨選択される出来事が全く異なるような状況を想定すればよい。

ポイントになるのは人生を何らかの関心に従って構造化したり、過去の物語や人生計画を変更したりすることそれ自体は、有用や利便はあっても、内面的には良いことでも悪いことでもない、ということである。ただし、単に現在の欲求にのみ従って行為したり、強固に設定した関心からひとつの筋に固執するような生と複数の評価可能な筋を持っている生は全く同じではない。なぜなら、多くのひとは過去に生じた失敗を挽回したり、過去の成功をさらに盤石なものにしたりすることを望むだろうし、ある関心に基づく評価のモードが自分の望むようにはいっていないとしたら、比較的うまくいっている別の評価のモードに切り替えて慰めを得たりすることもあるだろう。つまり、こと人生に関しては繰り返し熟慮して複数の仕方人生全体を構造化することを可能にしておくことが許されるのである。

ま と め

本論の出発点は、人間は過去を振り返ったり計画を立てたりする生き物である、ということであった。第一に主張したいのは、過去を物語化することによって現在の自分を成り立たせているものがなんなのかを理解した

り、計画を立てて行為を制御したりすることは、人間はただ本能的欲求に従って生きるだけではなく、合理的な行為者でありうるということである。そして合理的な行為者であるということは、自分自身にとって利益があるだけではなく、他人に自分を理解してもらうことや他人と行為を共有するうえでも重要な要件である。そして、過去の物語化と計画はそれぞれ独立に作用する訳ではなく、互いが互いを参照し合うような形で成立することもありうる。

また、人間が過去と未来にコミットメントしていることは、人間が過去に縛り付けられていることや、目的に向かって盲目的に邁進することを意味しているのでもない。それらは常に読み替えたり、変更したりできる柔軟なもの（悪くいえば不安定なもの）であることも強調しておいた。

われわれは自分や他人の生を評価するにあたっては、各瞬間ごとに評価対象が得た快や厚生を純粋に加法するだけではなく、その人生内部での価値の時間的な配分が重要な場面というものがある。その際には、人生全体をまとまったものとしてみるのが不可欠になる。ただし、そこでの評価のモードを決定する関心が一つに定まっている必要はないし、多くの場合では複数の評価モードを持っている方が様々な観点から評価出来るという点で有利である。このことから、ある人生を評価するにあたっては一度のみならず繰り返しの構造化、吟味を行うことが望ましいということになる。

人生の主要な評価モードを定めず、複数の評価可能性を残しておくことは相対的にすぎるといわれるかもしれない。しかし、人生において生じる（だろう）ことのほとんどは偶発的で、意味が確定していないものとしてわれわれの前に現れる。それでもなお、そこから何らかの意味をくみ出す余地を見つけるとしたら、過去の物語化や計画といった、ある程度の合理性と安定性を持ちながらも、評価者のある時点でのある関心に依じて解釈の変化を許すような柔軟なものが方法として馴染むことになるであろう。

文 献

- Bratman, M. E. (1983). "Taking Plans Seriously", *Social Theory and Practics*, 9.
 (=マイケル・ブラットマン「計画を重要視する」(星川道人訳), 門脇俊介・野矢
 茂樹編『自由と行為の哲学』, 春秋社, 2010年)
- Danto, A. C. (1985). *Narration and Knowledge*, Columbia University Press.
- Fischer J. M. (2009). "Stories and the Meaning of Life", in *Our Stories: Essays on
 Life, Death, and Free Will.*, Oxford University Press.
- Ricœur, Paul (1983). *Temps et récit, Tome I, Seuil.*
 ——— (1985). *Temps et récit, Tome III, Seuil.*
 ——— (1990). *Soi-même comme un autre*, Seuil.
- Velleman, David (2000). "Well-Being and Time", in *Possibility of Practical
 Reason*, Oxford University Press.
- Wiggins, David (2002). *Needs, Values, Truth: Essays in the Philosophy of Value*,
 3rd ed. Oxford University Press.
- 村山達也 (2005). 「人生の意味について 問いの分析の観点から」(『哲学』第 113
 集, 三田哲学会, 69-91)

註

- ¹ Danto (1985): chap.11 及び 251. Ricœur (1983): 365-379
- ² この発想もリクールから着想を得ている. Ricœur (1983): 101
- ³ Bratman (1983): 272
- ⁴ Ibid., 275.
- ⁵ リクールはこれを moral luck や fragility of goodness と結びつけている.
 Ricœur (1990): 230
- ⁶ たとえば村山 (2005): 83
- ⁷ Ricœur (1985): 446-447
- ⁸ ウィギンズも非認知主義者に対して同様の疑問を呈しているが, その動機と
 続く反論の趣旨は本稿とは大分異なったものである. Cf. Wiggins (2002): 100
- ⁹ Velleman (2000): 59